

《特 集》

故宇野重昭名誉学長・名誉教授  
北東アジア地域研究センター名誉研究員  
略歴・主要論文目録



略 歴

●履歴

1930年10月 石川県金沢市に生まれる（本籍は島根県隠岐郡）

2017年4月 神奈川県横浜市で逝去

●学歴

1953年3月 東京大学教養学部教養学科卒業（教養学士）

1956年3月 東京大学大学院社会科学研究科国際関係論専攻修士課程修了（国際学修士）

1960年3月 東京大学大学院社会科学研究科国際関係論専攻博士課程単位取得満期退学

1962年3月 東京大学大学院社会学博士授与

●職歴

- 1961年4月 外務省アジア局中国課外務事務官  
1964年4月 成蹊大学政治経済学部助教授  
1964年10月 上智大学外国語学部非常勤講師  
1968年4月 成蹊大学法学部教授  
1969年4月 学習院大学法学部非常勤講師  
1969年7月 東京大学教養学部非常勤講師  
1970年4月 エル・コレヒオ・ド・メヒコ大学院大学客員講師  
1972年4月 成蹊大学法学部政治学科主任（～1974年3月）  
1972年4月 一橋大学法学部・大学院非常勤講師  
1974年4月 成蹊大学修士課程研究指導担当  
1976年4月 成蹊大学評議員（～1978年3月）  
1977年4月 成蹊大学大学院法学政治学研究科博士課程研究指導  
1981年4月 東京大学法学部非常勤講師  
1982年4月 成蹊大学アジア太平洋研究センター所長（～1985年4月）  
1985年4月 国際基督教大学・大学院非常勤講師  
1987年4月 早稲田大学政治経済学部・大学院非常勤講師  
1988年4月 成蹊大学法学部長・理事（～1990年3月）  
1992年4月 共立女子大学国際文化学部非常勤講師（～1995年3月）  
1995年4月 成蹊大学長・理事（～1998年3月）  
1996年5月 北京大学客座教授  
1997年12月 島根県立大学設置準備委員長（～2000年3月）  
1998年4月 成蹊学園専務理事（～2000年3月）  
1999年3月 成蹊大学名誉教授  
2000年4月 島根県立大学学長  
2005年6月 復旦大学顧問教授  
2007年4月 公立大学法人島根県立大学理事長・学長  
2007年9月 中国社会科学院 日本研究所 名誉研究員  
2009年4月 島根県立大学名誉学長  
2009年11月 叙勲・瑞宝中綬章  
2015年4月 島根県立大学北東アジア地域研究センター名誉研究員  
2017年4月 叙位・正五位

●学会及び社会における活動歴

(学会における活動歴)

アジア政経学会常務理事（1974-97年）、名誉会員  
日本国際政治学会理事長（1986-88年）、名誉理事  
日本平和学会会員  
国際法学会会員

(社会における活動歴)

日本学術会議第16期会員  
日本学術会議第17期会員（運営審議員、第2部副部長、政治学研究連絡委員会委員長）  
公立大学協会会長  
公立大学協会顧問  
文部省学術審議会専門委員  
大学セミナーハウス常務理事・評議員  
独立行政法人大学評価・学位授与機構評議員  
特殊法人国際交流基金中国特別事業委員  
国立民族博物館運営委員会国際シンポジウム専門部会委員  
国連大学グローバル・セミナープログラム委員長  
国際交流基金日中交流関係委員  
日中文化交流協会常務理事  
財団法人北東アジア地域学術交流財団理事長  
島根県総合開発審議会委員  
財団法人しまね国際センター理事  
財団法人島根県文化振興財団理事  
国立島根大学運営諮問会議委員  
国立大学法人島根大学経営協議会委員  
独立行政法人国立病院機構浜田医療センター倫理委員及び治験審査委員会委員  
浜田国際交流協会特別顧問  
島根県功労者

著作目録

○著書・編著書

- 『太平洋戦争への道 第2巻 満州事変』（共著）朝日新聞社、1962年。
- 『太平洋戦争への道 第3巻 日中戦争 上』（共著）朝日新聞社、1962年。
- 『新中国資料集成 第1巻：1945～1947年』（共編）日本国際問題研究所、1963年。
- 『新中国資料集成 第2巻：1948～1949年9月』（共編）日本国際問題研究所、1964年。
- 『毛沢東』（単著）清水書院、1970年。
- 『中国共産党史資料集 第1巻：1918年～1925年』（共編）勁草書房、1970年。
- 『中国共産党史資料集 第2巻：1925年9月～1926年』（共編）勁草書房、1971年。
- 『革命家 毛沢東：革命は終焉らず』（単著）清水書院、1971年。
- 『中国共産党史序説 上』（単著）日本放送出版協会、1973年。
- 『中国共産党史序説 下』（単著）日本放送出版協会、1974年。
- 『日本社会文化史 第5巻 近代化の展開』（共編著）講談社、1974年。
- 『中国共産党史研究の現段階』（共編著）アジア政経学会、1974年。
- 『中国共産党－その歴史と実態』（単著）日本実業出版社、1981年。
- 『中国と国際関係』（単著）晃洋書房、1981年。
- 『現代中国の歴史 一九四九～一九八五 毛沢東時代から鄧小平時代へ』（共著）有斐閣、1986年。
- 『岩波講座現代中国 第3巻 静かな社会変動』（共編著）岩波書店、1989年。
- 『講座国際政治 第5巻 現代世界の課題』（共編著）東京大学出版会、1989年。
- 『農村地域の近代化と内発的発展論－日中「小城镇」共同研究』（共編著）国際書院、1991年。
- 『内発的発展と外向型発展－現代中国における交錯』（共編著）東京大学出版会、1994年。
- 『20世紀の中国－政治変動と国際契機』（共編著）東京大学出版会、1994年。
- 『北東アジア地域研究序説』（共編著）国際書院、2000年。
- 『深まる侵略 屈折する抵抗－1930年-40年代の日・中のはざま』（共編著）研文出版、2001年。
- 『地域に生きる大学－ダイナミックな知の共同体をめざして』（単著）山陰中央新報社、2002年。
- 『北東アジア研究と開発研究』（編著）国際書院、2002年。
- 『21世紀北東アジアの地域発展』（共編著）日本評論社、2002年。
- 『北東アジア世界の形成と展開』（共編著）日本評論社、2002年。
- 『北東アジアにおける中国と日本－北京大学国際関係学院・島根県立大学シンポジウム』（編著）国際書院、2003年。
- 『海洋資源開発とオーシャン・ガバナンス－日本海隣接海域における環境』（共編著）国際

書院、2004年。

『中国における共同体の再編と内発的自治の試み－江蘇省における実地調査から』（共編著）国際書院、2004年。

『日本・中国からみた朝鮮半島問題－中国復旦大学・島根県立大学合同シンポジウム：学術交流協定締結記念』（共編著）国際書院、2007年。

『地域政策研究の新天地－島根地域の将来展望のために』（共編著）公人社、2007年。

『転機に立つ日中関係とアメリカ』（共編著）国際書院、2008年。

『北東アジア地域協力の可能性』（共編著）国際書院、2009年。

『北東アジア学創成シリーズ第1巻／北東アジア学への道』国際書院、2012年。

『成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書／アジアからの世界史像の構築－新しいアイデンティティを求めて』（共編著）東方書店、2014年。

『中国式発展の独自性と普遍性－「中国模式」の提起をめぐって』（共編著）国際書院、2016年。

#### ○共著書

「国共対立時代」（共著）中屋健一編『世界史大系16 全体主義・民主主義の対立と第二次世界大戦』誠文堂新光社、1959年7月。

「日中戦争」（共著）中屋健一編『世界史大系16 全体主義・民主主義の対立と第二次世界大戦』誠文堂新光社、1959年7月。

「抗日民族統一戦線と中国共産党」歴史学研究会編（編著者代表 江口朴郎）『戦後日本史第5巻』青木書店、1962年10月。

「国共合作問題と中国ナショナリズム」アジア・アフリカ国際関係史研究会編（英修道・入江啓四郎監修）『アジア・アフリカ国際関係史叢書1 朝鮮・中国の民族運動と国際環境』巖南堂書店、1967年9月。

「東アジアにおける政治地理」木内信蔵編『朝倉地理学講座12 政治地理学』朝倉書店、1968年3月。

「中国ナショナリズムの発展とロシア革命の影響－陳獨秀と李大釗を例として」坂野正高・衛藤藩吉編『植田捷雄先生還暦記念 中国をめぐる国際政治－影像と現実』東京大学出版会、1968年3月。

「抗日戦争初期における中国共産党－毛沢東路線と『独立自主』の問題」野村浩一・小林弘二編『中国革命の展開と動態』アジア経済研究所、1972年3月。

「西洋近代国家のアジア進出」三輪公忠編『日本社会文化史 第7巻 世界の中の日本』講談社、1974年4月。

「中国におけるヨーロッパ民主主義の組みかえ－孫文から毛沢東へ」鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険』筑摩書房、1974年8月。

- 「毛沢東理論における社会主義－『新民主主義論』を中心として」徳田教之・辻村明編『中国ソ社会主義の政治動態』アジア経済研究所、1974年12月。
- 「中国外交論－自力更生論における理念と現実」川田侃・三輪公忠編『現代国際関係論 新しい国際秩序を求めて』東京大学出版会、1980年4月。
- 「一九三〇年代における日中の親近感と相剋」三輪公忠編『再考太平洋戦争前夜 日本の一九三〇年代論として』創世記、1981年7月。
- 「中国大陆における『終戦』（敗戦）と国共内戦」江藤淳編『占領史録第2巻 停戦と外交権停止』講談社、1982年1月。
- 「中国共産党成立前後とコミンテルン－最近の研究状況と若干の論点をめぐって」石川忠雄教授還暦記念論文集編集委員会編『石川忠雄教授還暦記念論文集 現代中国と世界その政治的展開』慶應通信、1982年6月。
- 「近代ヨーロッパのアジア進出」菅原信雄編著『20世紀国際政治史－東アジアと世界の交錯』而立書房、1982年10月。
- 「チツソ企業論」色川大吉編『水俣の啓示－不知火海総合調査報告（下）』筑摩書房、1983年7月。
- 「中国からみた日中戦争」三宅正樹・秦郁彦・藤村道生・義井博編『昭和史の軍部と政治（2）大陸侵攻と戦時体制』第一法規、1983年8月。
- 「外交」尾崎秀樹・戴国輝・野原四郎・野村浩一編『転換する中国Ⅰ 本によるアプローチ』勁草書房、1983年12月。
- 「幣原外交発足前後の日本外交と中国」入江昭・有賀貞編『戦間期の日本外交』東京大学出版会、1984年2月。
- 「蒋介石の連ソ政策－ソ連視察旅行から中山艦事件まで」高木誠一郎・石井明編『国際関係論のフロンティアⅠ 中国の政治と国際関係』東京大学出版会、1984年3月。
- 「日中提携の曲折した道－海を距てた友好と競合（第一部シンポジウム・第二次世界大戦と現代）」加藤周一・中井晶夫・三輪公忠編『第二次世界大戦と現代 日独仏国際シンポジウム』東京大学出版会、1986年12月。
- 「中国における郷鎮企業と小城镇建設問題－江蘇省を中心として」慶應義塾大学地域研究センター編『地域研究と第三世界』慶應通信、1989年3月。
- 「近代化の衝撃をこえて」三上次男・神田信夫編（岡正雄・江上波夫・井上幸治監修）『民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史』山川出版社、1989年9月。
- 「中国民主主義の可能性と社会主義－政治文化論の見地から」『岩波講座 現代中国 別巻1 民主化運動と中国社会主義』岩波書店、1990年3月。
- 「中国における縁故主義の現段階」武田清子編『中国のきり拓く道－日本より見る』勁草書房、1992年12月。
- “A Theory of Indigenous Development with Reference to China,” Chie Nakane and Chien Chiao,

eds., *Home Bound Studies in East Asian Society*, The Centre for East Asian Cultural Studies The Toyo Bunko, 1992.

「中国の民主主義－政治文化の転生とその展望」加藤節編『デモクラシーの未来 アジアとヨーロッパ』東京大学出版会、1993年11月。

「国際的接点としての香港」加藤節・宮島喬編『成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書 難民』東京大学出版会、1994年2月。

「二一世紀東亜形成輿『日中関係』」李玉・湯重南・張冰編(王春生訳)『二一世紀中国輿日本』北京大学出版社、1996年3月。

「鶴見和子・内発的発展論・アニミズム」河合隼雄ほか著『鶴見和子の世界』藤原書店、1999年10月。

「内発的発展論の展開過程と中国」中村則弘編著『日中社会学叢書 I 脱オリエンタリズムと中国文化－新たな社会の構想を求めて』明石書店、2008年2月。

「中国共産党史研究から内発的発展論へ」平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜『インタビュー戦後日本の中国研究』平凡社、2011年7月。

「あとがきにかえて／島根国際学術シンポ 2013 記念講演／グローバル・ヒストリーの観点からみた北東アジアの地域交流」飯田泰三編『北東アジア地域交流－古代から現代、そして未来へ』国際書院、2015年。

「変動期の国際秩序と『中国の夢』－一極の時代から多極の時代へ」佐藤壮・江口伸吾編『変動期の国際秩序とグローバル・アクター中国－外交・内政・歴史』国際書院、2018年。

#### ○辞典／用語解説

河原宏・藤井昇三編『日中関係史の基礎知識－現代中国を知るために』有斐閣、1974年7月。

天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波現代中国事典』岩波書店、1999年5月。

国際法学会編『国際関係法事典』三省堂、1995年。

#### ○主要論文

「第一次国共合作をめぐるコミンテルンと中国共産党(一)」『アジア研究』6-3、1960年3月。

「第一次国共合作をめぐるコミンテルンと中国共産党(二)」『アジア研究』7-1、1960年10月。

「統一戦線について とくに人民戦線から『モスクワ声明』まで」『論叢』1961年9月。

「国共合作論－中国政党史理解のために」『歴史教育』11-1、1963年11月。



- 「中ソ論争の歴史と中国の立場 その合理性と非合理性の相関」『季刊社会科学』1、1963年11月。
- 「米国における近代中国研究の現況」外務省アジア局中国課、1963年4月。
- 「アメリカにおける現代中国研究の動向」『アジア研究』11-1、1964年4月。
- 「国共合作問題と中国ナショナリズム」『外務省調査月報』5-9、1964年9月。
- 「中ソ論争の動向」『国際問題』58、1965年1月。
- 「中国共産党史研究資料について」『政治経済論叢』14-4、1965年2月。
- 「孫文の思想転換をめぐる（正）」『東亜時論』8-1、1966年1月。
- 「中国のベトナム援助の論理－大会の感想にかえて」『国際関係論研究』1、1966年4月。
- 「孫文の思想転換をめぐる（続）」『東亜時論』8-8、1966年8月。
- 「中国の自力更生と社会主義的国際協力」『政治経済論叢』16-1、1966年6月。
- 「中華人民共和国の対外路線と東南アジア」『国際問題』79、1966年10月。
- “Asian Political and Economic Studies (Japan Association for Asian Political and Economic Studies),” *The Japan Annual of Law and Politics*, No.15, 1967.1.
- 「中国における統一戦線の受容と変質－中国共産党一全大会から二全大会を例として」『政治経済論叢』18-1/2、1968年11月。
- 「日本におけるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ研究－中国・政治関係」『アジア経済』10-6/7、1969年7月。
- 「中国対外政策の発展過程」『国際問題』132、1971年3月。
- 「日中戦争の終結と中国－中国共産党外交の発端」『国際政治』45、1972年4月。
- 「国共合作の思想的前提－近代中国における外来思想と伝統」『思想』581、1972年11月。
- 「中国の危機感と反覇権闘争」『世界政経』5-3、1976年3月。
- 「“自力更生外交”の新展開」『世界政経』5-7、1976年7月。
- 「毛沢東思想における倫理革命と物質革命『革命に力を入れて、生産をうながす』」『現代思想』4-9、1976年9月。
- 「広田弘毅の対華政策と蒋介石－自護体外交の限界性」『国際政治』56、1977年3月。
- 「現代中国の革命と政治文化－毛沢東と孫文」『展望』220、1977年4月。
- 「新中国における未完の文明－プロレタリア文化大革命の遺産と変転」『季刊世界政経』1、1977年6月。
- 「自由と統合をめぐる区声白・陳独秀論争－ Kommunismus = Anarkeismus 論争の一断片」『成蹊法学』11、1977年6月。
- 「華国鋒体制の現段階－『四つの近代化』路線におけるイデオロギーの役割」『共産主義と国際政治』2-4、1978年1-3月。
- 「東アジア国際政治史」（共著）『国際政治』61/62、1979年5月。
- 「中国における伝統的国家観と近代国家の形成」『年報政治学 国民国家の形成と政治文化』



- 1978年版、1980年3月。
- 「独ソ不可侵条約成立前後の中国共産党－マルクス主義戦略論からパワー・ポリティックスへの傾斜をめぐって」『成蹊法学』17、1981年3月。
- 「マルクス主義以前の毛沢東－欧米思想との出会い」『中国研究月報』430、1983年12月。
- 「日本における地域研究の一考察－東南アジア研究と中国研究の対比の視点から」『アジア太平洋研究センター所報』1984、1985年3月。
- 「アジア情勢の変動と日本外交」『国際問題』300、1985年3月。
- 「後発国における社会主義と近代化－中国を例として」『アジア太平洋研究』2、1986年3月。
- 「日中戦争と国民政府－『七・七事変』前後の蒋介石」『国際基督教大学学報Ⅱ B 社会科学ジャーナル』25(2)、1987年3月。
- 「中国のナショナリズムと日本のナショナリズム－近代化における未熟な国家の衝突」『国際問題』328、1987年7月。
- 「共同体をめぐる論争と現代中国－開弦弓村の実例を中心として」『経済学部論叢』18-1/2、1988年2月。
- 「西安事変研究とその意義－日中戦争との関連において」『成蹊法学』28、1988年6月。
- 「江蘇省における“小城镇”建設の一考察－中国農村近代化の独自性を求めて」『アジア太平洋研究』7、1990年。
- 「近代国際政治史における社会主義」『国際政治』99、1992年3月。
- 「国際政治史における社会主義－党と国家の問題に寄せて」『成蹊法学』35、1992年3月。
- 「アジア太平洋地域の発展と日本、中国－冷戦後を中心に」『成蹊法学』36、1993年3月。
- 「中国的西欧思想受容の原型－学生期の毛沢東」『成蹊法学』37、1993年3月。
- 「ロシアにおける核の脅威と環境汚染－成蹊大学法学部・モントレイ国際大学合同講演会」『成蹊法学』38、1994年1月。
- 「アジア太平洋の国家・民族・地域と日米関係－ASEAN 地域フォーラム形成への過程を中心として」『成蹊法学』39、1994年3月。
- 「異体制間協力をめぐる競合とその展望－中国の対 APEC 政策を中心として」『アジア太平洋研究』12、1995年7月。
- “China and Japan in Search of Their Roles in the 21st Century: Regionalism or Globalism?” 『成蹊法学』45、1997年3月。
- 「二一世紀における役割を模索する中国と日本－リージョナリズムかグローバリズムか」『国際政治』114、1997年3月。
- 「大戦後の日中関係と国際環境」（共著）『成蹊法学』48、1998年12月。
- 「日本における中国研究－《曲折》の過程とその批判的分析」『成蹊法学』49、1999年3月。
- 「新段階の日中関係をめざして－日中平和友好条約締結二〇周年のまがりかど」『成蹊法学』49、1999年3月。

- 「内発的発展論の展開過程と現代中国」『日中社会学研究』8、2000年8月。  
「北東アジア研究の方法によせて」『北東アジア研究』2、2001年10月。  
「中国のWTO加盟と日中関係の将来」『北東アジア研究』4、2002年10月。  
「国際協力の明日－グローバル化時代における大学の役割と地域貢献」『国際協力論集』国際協力研究科創立10周年記念事業報告特別号、2003年11月。  
「北東アジアの地域間ネットワークと北東アジア学」『地域学論集』1-3、2005年3月。  
「『アジア冷戦史の再検討』討論総括」『アジア研究』52-2、2006年4月。

○書評

- 「三上諦聴・石川忠雄・芝田稔共譯『湖北秋収暴動経過の報告－中国共産党史研究の一資料』」『法學研究』34-10、1961年10月。  
「藤井昇三著『孫文の研究』とくに民族主義理論の発展を中心として」『国際問題』78、1966年9月。  
「衛藤瀋吉著『近代中国政治史研究』（一九六八年、東京大学出版会）」『国際法外交雑誌』68-1、1969年5月。  
「植田捷雄著『東洋外交史上』」『アジア研究』154、1970年1月。  
「徳田教之『毛沢東主義の政治力学』慶應通信 一九七七年四月」『アジア研究』24-3、1977年10月。  
「衛藤瀋吉編『現代中国政治の構造』（日本国際問題研究所＜国際研究叢書二九＞一九八二年、本文三四二頁）」『アジア研究』29-4、1983年1月。  
「中国農業発展の新段階－費孝通論文の目指すもの」『成蹊法学』27、1988年3月。  
「北京大学国際政治学部の二論文の紹介」『成蹊法学』41、1995年3月。  
「平野健一郎論文について」『北東アジア研究』2、2001年10月。

○その他

- 「毛沢東の対ソ態度－中国共産党史における独自性の発展」『中央公論』1964年12月号、1964年12月。  
「中国対外基本政策発言集－『平和五原則』から陳毅談話まで」『中央公論』1966年1月号、1966年1月。  
「米中交渉の長い道 特集・ニクソン－周会談のポイント その2」『朝日ジャーナル』14-8、1972年2月。  
「オーピッツ教授（ミュンヘン大学）を囲むパネルディスカッション 中国と毛沢東－大阪ゲーテ・インスティトゥートで開催」『アジ調月報』37、1973年5月。  
「八路軍西安弁事処記念館を訪問して－中国共産党史研究の一断面」『アジア・クォーターリー』8-1、1976年1月。

- 「海を抱く女－不知火の悲しみはまだ終わっていない」『未生』265、1976年6月。
- 「大学教育における合宿の意義」『厚生補導』121、1976年7月。
- 「大衆路線の系譜と党内闘争」『朝日ジャーナル』18-39、1976年9月。
- 「日中復交4年の再検討」『日中経済協会会報』40、1976年10月。
- 「毛沢東死後の中国外交と国際政治」『書斎の窓』260、1977年1月。
- 「現代社会主義論争 既成社会主義への異議申し立て 独自の道を模索する中国」『朝日ジャーナル』19-13、1977年4月。
- 「村瀬先生の御退職に際して」『成蹊法学』11、1977年6月。
- 「シミュレーション日本外交 木村俊夫・河上民雄・有賀貞・宮内邦子・佐瀬昌盛」『諸君！』10-3、1978年3月。
- 「中国外交と社会主義」『世界』403、1978年6月。
- 「世界史理解への手引き－近・現代史② 満州事変」『歴史と地理』336、1983年8月。
- 「中国を<読む>政治 “一个国家、兩種制度” 理論興実際」藤堂明保編『中国語』290、1984年3月。
- 「胎動する朝鮮情勢と中国外交－現実主義外交からの提言」『世界』464、1984年7月。
- 「党内整風〈中共中央関干整党的決定〉」藤堂明保編『中国語』302、1985年3月。
- 「戦後アジアの国際関係と日本－自主外交の確立を求めて」『世界』476、1985年7月。
- 「報告・討論 いま中国で何がおきているか」『世界』487、1986年4月。
- 「日中正常化の歴史的意義を省みて－当面の日中間の諸課題にふれて」『国際問題研究』20、1987年7月。
- 「民主化・近代化の中の“変わらない中国”－農村地帯から民主化運動を見る」『週刊読書人』、1989年7月3日。
- 「中国農村にとって民主化とは何か」『世界』534、1989年11月。
- 「中国における地方都市工業化問題（「小城镇大問題」研究）に関する中間報告（第3次）」（共著）Seikei University CAPS Discussion Paper Series 27、1990年3月。
- 「序－特集 北京大学との国際学术交流」『成蹊法学』39、1994年3月。
- 「第三回成蹊大学法学部・北京大学国際政治学部国際学术交流討論会」『成蹊法学』40、1995年1月。
- 「中国の小城镇・郷鎮企業と鶴見和子」『思想の科学』533、1996年2月。
- 「アメリカの後退と伝統的民主主義の危機？－国際関係学会・欧州国際関係常設グループ合同会議に出席して」『学術の動向』1999年8月号、1999年8月。
- 「20世紀における中国の激動と国際契機（中国社会科学研究会における基調講演）」『東温求索』11、2000年。
- 「新春対談 平和への道－究極のグローバリゼーションを求めて」『女性展望』533、2002年1月。

『北東アジア研究』第29号（2018年3月）

『北東アジア学創成に向けてⅠ』（編著）島根県立大学北東アジア学創成プロジェクト、2003年。

「高等教育の転機と高＝大連携－教養教育を考え直す」『大学と学生』480、2004年9月。

『北東アジア学創成に向けてⅡ』（編著）島根県立大学北東アジア学創成プロジェクト、2005年。

「序」島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』ペリかん社、2005年3月。

「会長・学長インタビュー 公立大学協会“地域の現実”に立脚して新しい時代の知の拠点を形成する」『文部科学教育通信』143、2006年3月。

『北東アジア学創成に向けてⅢ』（共編著）島根県立大学北東アジア学創成プロジェクト、2006年3月。

「刊行にあたって」江口伸吾著『中国農村における社会変動と統治構造－改革・開放期の市場経済化を契機として』国際書院、2006年3月。

「鶴見和子さんを追悼して－内発的発展論の始めのころ」『週刊読書人』2006年8月。

「公立大学の現状と課題－『公共』の立場の確立をめざして」『IDE』488、2007年2-3月。

『北東アジア学への道－講義「北東アジア研究総論」から』島根県立大学北東アジア学研究懇談会、2007年3月。

『宇野重昭先生喜寿祝賀記念文集』（共著）成蹊大学宇野ゼミ同窓会・生涯学習研究会有志、三恵社、2007年11月。

「日中関係の危機に文化の松明を掲げよう」『日中文化交流』No. 798、2012年11月1日。

『成蹊大学宇野ゼミナール50周年記念誌』（共編著）三恵社、2014年9月。

「はしがき－『蒋介石日記』の価値と本書の意義」鹿錫俊著『蒋介石の「国際的解決」戦略：1937-1941』東方書店、2016年2月。

「安倍家三代世襲の果てに第3部3最終回／恩師が首相へ涙の諫言」『AERA』2016年5月2-9日。

遺稿より

郷里の隠岐の島から遠く離れた金沢で生まれた私は、当初は人間好きで歴史好きの父と母の影響のもと家庭団らんの楽しい幼児成長期を経験したが、やがて近代人の宿命として引っ越しました引っ越しの連続で、常に異質の人と出会い、故郷喪失者の思いから周辺の学校仲間とも溶け合うことが出来なくなっていった。ただ規則にしたがって、学校までの道をそれと自覚することなく呆然と歩き、途中の記憶も皆無のまま、気が付いてみたら学校の中にいる自分を見出したものである。

いま考えてみると一種のノイローゼの連続だったようにも思われる。小学校三年生ぐらいのころから、しばしば長期欠席し、ひたすら読書の中に沈潜することによって自分の存在理由を見出そうとしていたのはそのためである。

そして、引きこもり時代、自分の意識を形成する過程で、歴史、年表、統計、さまざまな系統図、そして多様な個人の日記などの記録に、異常なほどの愛着をもつに至った。それは変化しないと思われたからである。

そして大学1年生になると、まず中国の内戦の進行状況に非常な関心をもち、当時可能なだけの新聞、パンフレットなどを切り抜き、部屋の自室の押し入れの半分以上が使えなくなるまでに積み上げた。この個人的特徴が性格となった。将来学者になるため早くから才能を発揮したというような大それたことをいう気持ちは全くない。ただそのような資料探索が自分のアイデンティティとなり、対象が面白くなってきただけのことである。

したがって大学院を出て外務省勤務となると、実務は別として、時間のある限り数階建ての大きな資料収納室に入りこみ、外交文書に編集される以前の現地の各種往復書簡や血まみれのビラのたばなどをめくり、埃でもうもうとしているなかに破れそうな資料の頁をめくることに喜びを実感した。現在の日本でこの事実を確認・評価しているのは私個人だけであるという個人的知的高揚感が私を支えたのである。

その結果次第に自分の生きた時代の経験そのものの歴史が実体となり、「満州事変」や「太平洋戦争」の怖しさに触れると、その研究に傾斜していくことが生きがいとなった。

ただし私の関心は、多くの歴史学者や社会学者に見られるような“科学的・理論的歴史研究”の推進ではなく、下から、あるいは実感から、危機の時代に個々の人びとが思わず発出した記録を積み上げて、これによっていわば“正規の歴史”とのずれを発見し、生きた世界史を創造することに生きがいを感じるようになった。

具体的な例を一片だけ紹介してみたい。私の実感では、外交文書や重要文書類には、興味深い個人的記録が数限りなくいりまじっている。それは後に大学院生時代高校教師として文部省要領によって教えた筋の通った歴史とはだいぶ距離がある。

たとえば手にした教科書には、「満州事変」は、軍部の独善的陰謀で中国の隙をついて計画的にすすめられたという一貫した記述がたんたん進められている。しかし個々の人

の思いと動きは複雑である。たとえば国際協調主義者であった幣原喜重郎首相などは自分の側近との情報交換を進め、軍部の独善的侵略工作が進んでいることを相当程度知っていた。しかしそれを阻止できる方法を具体化することを少し早すぎる段階であきらめた。その思いの過程はあまり知られていない。かれらは関東軍の陰謀の実行を抑えきることができないことを見通し、結果的には「堅実に行き詰っていくよりほかに方法がない」といったようなことを秘密文書のメモ書きに書きこんでいた。たんなるメモではあるが幣原の気持ちを端的に表現している。

それは一種の責任放棄とも見られよう。しかし私は、だからといって戦争責任を性急に個人に求めることには本来的に無理があると考えている。近代戦争の戦争責任というものはそのそんなに単純なものではない。私の知りたいのは、そのような個人的感情や判断がどこまで事実を動かしたのか、そのような個人の存在がどこまで歴史形成に関係があったのかというような人間臭い次元のことである。

（2016年12月）

#### 付 記

このたびは、『北東アジア研究』に亡き父宇野重昭の追悼特集号を企画していただき、深く感謝しております。このうち、履歴と業績につきましては、江口伸吾先生、沖村理史先生に作成していただきました。ここに両先生に心より御礼申し上げる次第です。

なお合わせて掲載していただいた「遺稿より」は、父が刊行を準備していた著作の原稿の一部です。未定稿ですが、父の学問に対する考え方の一端を示しているため、葬儀の際に配布した小冊子に収録しました。今回、改めて『北東アジア研究』に再録していただき、新たな読者を得ることを嬉しく思っております。

2017年11月

宇野重規